Germania-Romana
(1)
ゲルマンとラテンの間で

河　崎　　靖

目次

序．国家を越えた方言としてのオランダ語
1．ゲルマンとラテンの間で
—低地諸国（オランダ，ベルギー）の言語事情—
1－1．ゲルマン語内でのオランダ語の位置付け
1－2．ベルギーの言語事情　＜以上，今回＞
2．「ゲルマンvs. ローマvs. ケルト」という図式
2－1．ゲルマンとローマの境界線の成立
2－2．オランダ語の史的発達　＜次回＞
3．ゲルマン語のローマ，ケルトとの接触
3－1．ベルギーの言語境界線
3－2．新たなる地名学の可能性　＜次々回＞

序．国家を越えた方言としてのオランダ語

ゲルマンとローマの言語上の境界線を，現在のヨーロッパ地図の上で探し当てるとするならば，およそライン川そして，その下流域から少しばかり西に入ったところ，今のベルギー王国を東西に横断する言語境界線こそがこれに当たる．一国を分断する，この目に見えぬ境界線は，言語史の大きな流れの中，さまざまな歴史を包み込む，興味の尽きぬ泉である．

ベルギーは，ゲルマン系のフランドル人とラテン系のワロニー人の2つの民族からなる複合民族国家（連邦国家）である．民族的に，北部のフランドル人は，オランダ人と同じく，低地フランク人である．もともと，現在のベルギーの地域は，ラテン化したケルト人の居住地であったが，ローマ帝国末期から10世紀までの間に北部や東部からゲルマン人が移住し，西フランドル州ムスクルンMoskroenからリエージュ州ラネーLanayeまで，ほぼ東西に延びる言語境界線は，それ以来ほとんど変わることなく続いている．北部のフランドル語とは，ベルギー王国の北部で話されている，いわゆるオランダ語の通称名である．ベルギーでは，南部のフランス語と並んで公用語である．この二つの公用語の存在により，北部ゲルマン系のフランドル人と南部ラテン系のワロニー人の間で言語的対立が必然化している．フランドル語は，1581年の独立戦争の結果，南北に分離したネーデルラント南部のオランダ語にその起源をもつことから，現在のオランダ王国のオランダ語およびフランドル語を併せて，ネーデルラント語と呼ばれることもある．フランドル語は，構文面でフランス語の影響があり，また，発音，語彙の面でオランダ国内のオランダ語とは若干異なるが，オランダ語と別個に存在する言語ではなく，規範となる標準語は両者同一である．一方，フランス語を話す，南部のWalen「ワロニー人」の名は，Volcaeという西暦紀元の初めの頃，ヨーロッパのさまざまな地域に住んでいたケルト人の一部族の名に由来している．ゲルマン諸部族はWaals(ch)（ドイツ語Welsch＜Wallisc）という名を，初めはケルト人を指すために使っていたが，やがてガリア人がローマ化したあとは，ロマンス語を話す諸部族の名称になった．言語に関する用法としては，Waalsという語は「理解できないもの」，すなわちフランス語のことであった．ドイツ語のKauder*welsch*，オランダ語のkoeter*waals*「わけのわからぬ言葉」という語にも入っている．また，ドイツ語のRotwelschも「裏社会の隠語」という意味の語で，オラ

ンダ語では普通Bargoensと呼ばれているが．この語自体はおそらくBoergondisch「ブルゴーニュ語」の崩れた語形で，すなわち，これもフランス語，つまり「理解できない言語」のことであった．このようなさまざまな逸話を残すWalloniaという名称は，フランス語の話される南部ベルギーに対する呼称としては，1840年代に入ってようやく通用するようになった[1]．少し歴史を紐解けば，Belgiumという語にもケルト人の一部族の名が見出される．かつて，ローマ人はBelgaeという部族がオランダ南部に住んでいるのを発見したのであった．人文主義時代，このBelgiumという語は，オランダ全域を指すのに用いられていたが，1830年に，オランダの南の，オランダ語とフランス語が使われる地域に新しく誕生した王国のために名前が必要となった時に復活したのである．

言語史上，ゲルマンとラテンの間に位置する小国ベルギーを軸に，これを起点として，西はイギリス，南はアルプス山麓まで，ゲルマン語の推移していくさま，その背景にある史実を具体例に即して呈示しようというのが本稿の目標である．

1．ゲルマンとラテンの間で—低地諸国（オランダ，ベルギー）の言語事情—

1－1．ゲルマン語内でのオランダ語の位置付け

西暦2000年，日蘭交流の歴史は400周年を迎える．近代日本の恩師であったオランダ語について今日，日本であまりに顧みられることの少ない現状に鑑み，本章（1－1）ではまずは紹介も兼ねて，ゲルマン諸言語内でオランダ語はどのような位置付けにあるのかを探ることから始める．

英語のnameやオランダ語のnaam，ドイツ語のNameは語形上，日本語

のnamae「名前」と非常に似てはいるけれども，実際にはそれは単なる偶然にすぎない．この例とは別に，オランダ語から日本語に入った「コーヒー」(<koffie)の場合はどうであろうか.「コーヒー」は，原産地エチオピアからアラビア語 qahwa，トルコ語 kahveを経て17世紀にヨーロッパに伝わった．ことばの上では，もともとの語形をかなり維持した形で世界各地に広まった語である．この「コーヒー」の例と併せて，「ワイン」，「お茶」のように，品そのものが原産地から遠い異国へ旅する際，その名前もともに放浪したような語ならば，その伝播した地の言語の語形がよく似ているのは当然と言えよう．

「コーヒー」：アラビア語qahwa，トルコ語kahve，イタリア語caffè，英語coffee，オランダ語koffie，ドイツ語Kaffee，フランス語 café，ロシア語kofe，日本語「コーヒー」.

「ワイン」　：ラテン語vinum，フランス語vin，イタリア語，スペイン語vino，ゴート語wein，英語wine，オランダ語wijn，ドイツ語Wein，ロシア語vino.

「お茶」　：中国語厦門（アモイ）方言t'e，英語tea，オランダ語thee，ドイツ語Tee，フランス語thé，イタリア語té，スペイン語te.

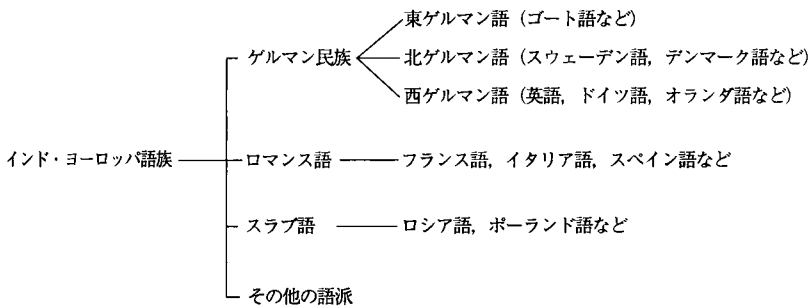
これら諸例に加えて，「蜂蜜（酒）」という語もロマンに満ちた語である．英語やオランダ語，ドイツ語でこの語に相当する語（英語：mead，オランダ語：mede，ドイツ語：Met）は，広くユーラシア大陸を見回してみても，

ハンガリー語méz，ギリシア語méthy，リトアニア語midùs，ロシア

語med，サンスクリット語madhu

というふうに，かなり広範囲に分布していることがわかる．学術的には未だ，日本語のmitsu「蜜」との対応関係が証明されたわけではないが，この語が上例のような放浪語(Wanderwort)であった可能性もなくはない．

さて，上例以外にも，英語とオランダ語，ドイツ語ではたくさんの語彙が非常によく似ている．これは，これらの言語が同じ系統に属している（こうした関係を姉妹語という）からで，次の図に示されるようなことばの系統樹にまとめられる．



こうした歴史的背景があるために，英語とオランダ語，ドイツ語には，特に基礎語彙において，数多くの対応が見られる．そのいくつかを示してみる．

英語p(p) : a*pp*le　　英語p : shar*p*

蘭語p(p) : a*pp*el「リンゴ」　　蘭語p: scher*p*「鋭い」

独語pf : A*pf*el　　独語f(f) : schar*f*

英語f : thie*f*　　英語v : gi*v*e

蘭語f : die*f*「泥棒」　　蘭語v : ge*v*en「与える」

独語b : Die*b*　　独語b : ge*b*en

英語 t： si*t*　　英語 t： wha*t*

蘭語 t(t)：zi*tt*en「座る」　　蘭語 t： wa*t*「何」

独語 tz： si*tz*en　　独語 s(s)：wa*s*

英語 k： ma*k*e

蘭語 k： ma*k*en「作る」

独語 ch：ma*ch*en

このような語彙の対応関係については，すでに19世紀にJ. Grimmが発見し体系化している．Grimmによって，ゲルマン語派を通して親縁関係にある諸言語にはある種一定のの対応が見られることが明らかにされた．ここでは，一例として，ゲルマン語派に属する，英語，フランドル語（ベルギー北部），オランダ語，ドイツ語の文字と発音の関係をごく単純化した形で示してみたい．

	発　　音			
	英　語	フランドル語	オランダ語	ドイツ語
スペル w	[w]	[w]	[v]	[v]
スペル v	[v]	[v]	[f]	[f]

このように，国境などの地理的境界を越えて一つの特性が徐々に推移している様子がうかがえる．日本で言えば，ちょうど方言差に相当し，日本国内に東北弁とか関西弁とかいくつかの方言があるように，西ヨーロッパに，英語，オランダ語，ドイツ語などゲルマン語派に属する個別言語がいくつかあると捉えられよう．

中でも，オランダ語とドイツ語はかなりの類似性を示すため，時にそれら二言語を方言の連続体とみなそうとする考え方がなされることがある．

逆に，オランダ語とドイツ語の間で最も顕著な相異点はと言えば，子音が体系的に変化した，いわゆる「高地ドイツ語子音推移」である．ドイツ語も，他のゲルマン諸語と共通のゲルマン祖語から派生したという点ではオランダ語，英語と同じだが，ドイツ語の場合は，この「ゲルマン語第二次子音推移」とも呼ばれる，南部ドイツを中心に起こった音変化によって語形が多少，他のゲルマン諸語からずれ，*Katze*「猫」，*Pfanne*「フライパン」，*Pfeffer*「胡椒」，*zehn*「10」のようになっている．オランダ語も英語も低地ゲルマン語であるため，このような変化は被っていない．また，オランダとドイツ北部の低地ドイツ語の語形は英語に似ている（蘭・低ドmaken 'make'「作る」，蘭・低ドpund 'pound'「ポンド」など）のに対し，ドイツ南部の高地ドイツ語は，-kの代わりに-chを，p-の代わりにpf-を使う．中部ドイツ語地域では，個々の等語線は必ずしも一致しておらず，「高地」と「低地」の語形式のいろいろな組み合わせが見られる．

「高地ドイツ語子音推移」という子音の体系的な変化は，その名が示す通り，ドイツ南部に子音推移の現象を引き起こす核があり，強力な推進力をもってドイツ語圏を北の方へと進み諸方言に影響を与えていったという現象である．この音変化は，今でも一番その特色を色濃く残している南の地域でまず起こり，北の方へ拡大するにつれ，その強さは次第に衰えていったとみなされている．確かに，高地ドイツ語域の南部（上部ドイツ語域）では，次表に見るように，該当子音の破擦音，摩擦音化がそろって起こっているが，高地ドイツ語の中央部では，破擦音pf, tzは現われるがkxは見られず，さらに北に進むと，破擦音tzのみで，pf, kxは現われないという漸次的な移行状態から見てこうした捉え方が通常なされる．

一方，この見方と並行して，上のような言語状態を捉えるもう一つの観点として，「高地ドイツ語子音推移」は本来，高地ドイツ語最南端部から北の端Benrather Linie(maken-machen-Linie)まで一様に起こり，その後，

地域	方言名	t-	-t-	-t	p-	-p(-)	k-	-k(-)
北部	Altsächsisch	t	t	t	p	p	k	k
↑	Mittelfränkisch	z	zz	z/t	p	f(f)	k	ch
	Rheinfränkisch	z	zz	z	p	f(f)	k	ch
	Südrheinfrankisch	z	zz	z	p	f(f)	k	ch
	Ostfränkisch	z	zz	z	pf	f(f)	k	ch
	Bairisch	z	zz	z	pf	f(f)	kx	ch
↓	Alemannisch	z	zz	z	pf/f	f(f)	ch	ch
南部	Langobardisch	z	s(s)	s	p	p/f(f)	k	ch

中部ドイツ語圏の北部ではフランク方言によるクレオール化によって抑えられ退行していったとする考え方がある．言い換えれば，子音推移には関わらなかった，影響力の強いFranken地方の方言に，いったんは推移を被った高地ドイツ語諸方言が音的，語彙的に同化作用を受けたのではないかとみなす捉え方である．フランク族の政治勢力と言語的影響力は平行関係にあって，高地ドイツ語子音推移が地域により階層をなすのは，フランク族から受けた影響の程度差によるのだと考えるのも，音変化の拡張のプロセスとして自然言語の一現象を説明するのに無理のないものである．もちろん，このような社会言語的な問題には，言語地理学あるいは文化史に関する歴史的な考察を欠くことはできない．

こうした複雑な言語相に絡んで，言語と方言の区別を考える場合，一般に人々が相互に理解できるのかどうかが一つの重要な要素である．例えば，オランダ語を母語とする話し手は低地ドイツ語を理解でき，低地ドイツ語の話者はドイツ中央部の方言が理解できる．しかしながら，オランダ語とバイエルン方言のように方言連続体の両極にある言語変種では，相互の理解は難しい．このような状況では，言語と方言を言語学的に区別すること

は多かれ少なかれ恣意的とならざるを得ない．例えば，スイス・ドイツ語は，標準ドイツ語の話し手には到底，理解できない言語であるにもかかわらず，方言とされている．その理由は，スイス・ドイツ語は，スイスという国の中で書き言葉として使われている標準ドイツ語と並存しているからであり，また，地方方言から標準語に至る言語変種が連続しているため，その境界線がはっきりしないからである[2]．

古い時代に遡れば，上述の諸言語間の類似性はさらに強まる．ヨーロッパの文献について言えば，古い資料は主に聖書関係のテクストに頼ることになる．ゲルマン語系の諸語についてもやはり聖書の断片がその言語の最古のまとまった文献であるというケースが多い．ゲルマン語の古い状態を示すのに，聖書の一節を挙げることから始める．新約聖書・マタイ伝（6, 9-13）の「天にまします我らが父よ」の箇所は各個別言語（10世紀以前）でどうなっているかというと，

古英語：Fæder ûre, þûþe eart on heofonum.
古低独語：Fadar is usa firiho barno, the is an them hohon himila rikea.
古高独語：Fater unsêr, dû pist in himilum.
ゴート語：Atta unsar thu in himinam.

少し時代が下るとオランダ語にも文献が現われる．ここでは，『ライネケ狐』からの一節を引用することにより中世低地ドイツ語との対比の形で中期オランダ語の姿を示してみる．

中低独語：It geschach up einen pinxtedach, dat men de wolde unde velde sach grone stân mit lôf unde gras.（1498年）
中期蘭語：Het was in eenen tsinxen daghe, dat beede bosch ende

haghe met groenen loveren waren bevæn.（1270年頃）

ここで，少しオランダ語の時代区分について触れておこう．de Fries et al. (1993)『オランダ語史』等に見られる一般的なものは次の通りである．他のゲルマン系諸言語も大体これに準じる．

中世期 de oudste fasen

1. 古期オランダ語 Oudnederlands
2. 中期オランダ語 Middelnederlands

新オランダ語 Nieuwnederlands

1. 成立（16世紀）opbouw van het Nieuwnederlands in de 16de eeuw
2. 発展（17,18世紀）uitbouw van het Nieuwnederlands in de 17de en 18de eeuw

現代オランダ語 Modern Nederlands

極めて古い時期に関しては先ほど述べたように，オランダ語には言語資料が見出されず，また10, 11世紀に入ってからの文献もいずれもキリスト教関係のものに限られる（次表参照）．

中世前半（7～11世紀）のオランダ語文献

7世紀	人名，地名
8世紀	人名，地名
9世紀	人名，地名，注解語彙集
10世紀	人名，地名，注解語彙集，'Wachtendoncksche Psalten'
11世紀	人名，地名，注解語彙集，'Leidener Williram'

次に，現代のゲルマン諸語につき方言推移の様子を見るべく具体的にいくつかの個別言語に代表させて基本的な語彙を対照させてみよう．

英　語	オランダ語	ドイツ語	
apple	appel	Apfel	「リンゴ」
ten	tien	Zehn	「10」
book	boek	Buch	「本」
church	kerk	Kirche	「教会」
day	dag	Tag	「日」
goose	gans	Gans	「ガチョウ」
year	jaar	Jahr	「年」
seek	zoeken	suchen	「探す」

上表のように，これらのうちどれか一言語の知識のある人なら，おそらく他の二言語の単語の意味もすぐに見当がつくであろう．もちろん逆に，しばしばあることではあるが，外見が類似しているものは，意味が場合によっては少なからぬ違いがあるケースがある．例えば，蘭：*aardig*「感じがよい」—独：*artig*「行儀良い」，蘭：*aandacht*「注意」—独：*Andacht*「尊敬」，蘭：*verzoeken*「頼む」—独：*versuchen*「試みる」などである．それにしても，英語，オランダ語，ドイツ語の語彙がこれほどまでに似ているとすると，果たしてそれらのnative speakerの感覚というのはどのようなものであろうか．もし英語の話者がオランダ語の勉強を始めると，少なくとも最初のうちはオランダ語と自分の母語とで語彙があまりに酷似していることに気付くであろう．ただ，長い目で見ると，当初思ったほど，この点が英語話者のオランダ語学習に役に立つようではなさそうである．と言うのも，英語の語彙はあまりにも強く，また，あまりにも長く，非ゲ

ルマン語的な影響に受けてきたからである．そのせいで，ノルマン人侵入以前の古英語(Old English)期と比べると現代英語は自ら本来のゲルマン語的な姿を保つことがなかった．片や，オランダ語の語彙は，その多くがゲルマン語起源のものである．もっとも，オランダ語史においても語彙面で外国語からの影響を少なからず被っていることは言うまでもない．必要に応じて他言語から借用を行い語彙を増やしていくのはどの言語にとっても自然なプロセスである．とりわけオランダ語の場合，国民のポリグロットな性格のせいか他のゲルマン語系の語彙を割と受け入れる傾向があるのは確かである（fifty-fifty「五分五分」＜英語から＞，überhaupt「そもそも，一般的に」＜ドイツ語から＞など）[3]．

１－２．ベルギーの言語事情

なぜベルギーの言語境界線は国境線と一致しないまま長きにわたって不自然に存在し続けているのであろうか．この課題に答えるには，民族，言語，宗教といったさまざまな角度から史的な考察を行うことが必要である．1993年，法律の上でも両言語圏による連邦制が採用されることとなったが，複雑で根が深い言語問題については，お互いの立場を認め，極端な分裂主義に走ることなく国家的統一を保持しようというのがフランドル，ワロニー両陣営の意向である．とにもかくにも違う言語を使う異なる二つの民族が政治的統一体としての国家を割ることなく融合し合うというのは想像する以上に容易なことではない[4]．

ベルギーは，ラテン系のワロニー人とゲルマン系のフランドル人の二つの民族から構成されている．文化的な伝統という意味ではかなり長い歴史を有するが，独立国家としては1831年以降ということになりそう古いとは言えない．北のオランダ寄りに住むフランドル人は民族的にはオランダ系

でありフランドル語を使っており，一方の，南側フランス寄りに住むワロニー人はフランス語を話す．このようにベルギーには二つの民族が南北に分布しており，その地域間の境界線がそのまま「言語境界線」になるわけで，その境界線は首都ブリュッセルの南約30キロのあたりを東西に走っており，これを境に両者は対立の関係にある．フランドル人はワロニー人の使うフランス語を使いたがらないし，逆にワロニー人にとってはかつての文化的優位感のためかフランドル語などもってのほかという具合である．必要に応じてベルギー人がある時はフランドル語で，またある時はフランス語で会話を行うこと自体に，この国の「言語」に関わる長い紛争の歴史の跡を感じとらねばならないのであろう．ヨーロッパの政治舞台でベルギーのことが「言語紛争に明け暮れる平和な国」と言われるのも，今日ヨーロッパ統合という壮大な理想に向け，異なる2民族が対立しながらも共に国を守ろうとする一見矛盾するような理念に支えられ，言語紛争に見られる民族対立をもっとずっと広いヨーロッパの言語世界という文脈の中で解決を図ろうとするベルギー人の姿勢によるものであろう[5]．

ゲルマンとラテンの間に位置するベルギーにおいて，言語紛争が引き起こされたのは歴史的必然と言えるかもしれない．ただ，この国の場合ほど，政治的・行政的権限の分権化が言語に基づいて行われたケースは珍しいのではないかと思われる．すなわち，ベルギーでは，使用言語が，オランダ語か，フランス語か，蘭・仏二言語か，もしくはドイツ語かという言語区分に応じて，法律上，文化共同体としてはオランダ語，フランス語，ドイツ語に，また，行政地域としては，フランドル，ワロニー，ブリュッセルに分類される．こうした分権化の象徴的な例として，ルーヴァン大学の分割がある．フランドルの地にあるこの伝統ある大学は，結局，ワロニー地域にもう一つ，新ルーヴァン大学(Leuven la Neuve)を設けることによって問題の解決を図った．言語によるこうした対立の構図は，歴史的に見て根

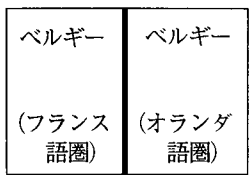
深いものがある．1477年にブルゴーニュ公国のネーデルラントはハプスブルク家に渡り，最終的にはカール５世の大ヨーロッパ帝国の一部となった．カール５世は，ヘント(Gent)で生まれ，ドイツ語圏である神聖ローマ帝国の君主となった．その際，彼はブリュッセルにて君主として宣誓就任し，後に退位もしたが，そこにおいてフランス語の地位が脅かされることはほとんどなかった．カール５世の宮廷ではフランス語が用いられていたが，当時，王宮においてそれはよくあることであった．そして，カール５世その人が「私は神にはスペイン語で，女にはイタリア語で，男にはフランス語で，そして馬にはドイツ語で話しかける」という文句で有名になっているのである．ドイツ語といっても，おそらく当時は，そしてこの場合は明らかに，オランダ語もドイツ語も分け隔てなく指し示していよう．このように，オランダ語とフランス語がぶつかり合う地域であったベルギーでは，それぞれの言語が極めて早い時代から社会的に異なる意味合いを帯び始めていたのである[6]．

ベルギーの言語紛争についての一般的な認識としては，おそらく，19世紀以来のフランドル語地域とワロニー語地域の長い紛争の時期を経て，国土が（ブリュッセル首都圏を加えて）三つの地域共同体に分割，連邦制化される形で終焉したという見方であろう．しかしながら，「言語紛争はフランドルとブリュッセルにおいて繰り広げられた出来事であって，ワロニーは言語紛争の場になったことも，またその直接の当事者であったこともなかった」[7]という指摘は示唆的である．つまり，ベルギー国内の言語戦争と，フランドル人，ワロニー人の間の民族的対立とは分けて考えなくてはならない．歴史的に見ると，フランドル地域とブリュッセルでの言語に関する争いが落ち着いてから，フランドル地域とワロニー地域の対立が激化したのである．先に触れた，ルーヴァン大学分割問題（1970）でもって，フランドル運動これに極まれりの感があるが，その後ルーヴァンの街から

フランス語の表示が完全に消え失せたのは，それほどまでにかつてのフランス語の支配は圧倒的であり，だからこそそれに立ち向かうフランドル運動の盛り上がりは激しく徹底的であったということを物語るものであろう[8]．

ベルギーという国を，さらに南北の軸というもう一回り大きな枠組みの中で捉えてみると，オランダ語圏とフランス語圏の対立は単に一国家の分断（図１）というより，二大語圏の内に国境線という大きな境界線を引く要因となっている（図２）とも言える．

図1



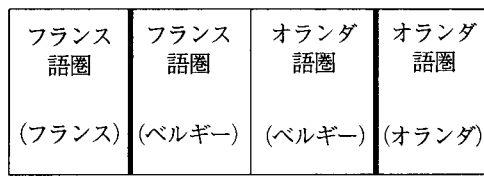


図2

二つの図のうち後者＜図２＞が示すように，オランダ語話者であるフランドル人は国境によりオランダ人と，またフランス語話者であるワロニー人は同じく国境のためフランス人と分け隔てられている．言語の面では対立するフランドル人，ワロニー人がそれでも共に一つの国家を維持し続けていこうとする裏には，西欧列強の複雑な政治の荒波にもまれてきたという経緯がある．1831年に独立を勝ち取るまでは，合戦の場として，また勝敗の際の受与の対象地域として常に大国に翻弄されてきたのである．またフランドル人がオランダ人の支配下に入ることを望まないのは，自らが熱心な旧教徒であるという宗教的な理由も考えられよう[9]．

こうした国境線の線引きの背景を探るとすれば，古くカール大帝（フラ

ンク王国の王，在位768～814年）の時代にまで遡る．ドイツの北からローマ，ピレネーにまで広がる統一西ヨーロッパを完成させたカール大帝の死後まもなく，この帝国は三つに分裂し843年のヴェルダン条約によってカールの子である敬虔王ルードウィッヒの息子達にそれぞれ分け与えられた．この三つの部分とは，基本的に禿頭王カール2世の治める西のフランス，ドイツ人王ルードウィッヒ2世の治める東のドイツ，そしてロタールの治めるいわゆる中フランク王国であり，この三番目の王国の細長い領土は，北はオランダに始まりルクセンブルク，アルザス・ロレーヌ（ドイツ語・オランダ語でロレーヌはLotharingen＜Lothar「ロタール家の領土」），ブルゴーニュを南北に横切って北イタリアに達していた．10世紀にはこの三分割状態は二分割になり，ドイツがオランダ，フランス両言語の使われる低地地方を併合して神聖ローマ帝国と呼ばれるようになった．一方，フランスがスヘルト川からノルマンディーにまで広がるフランドル地方の残りを併合した（本稿末＜地図1＞参照）[10]．このような歴史上のいきさつが起因となり，今日のベルギーがオランダ語・フランス語の二言語国家となる下地が当時すでにできあがっていたのである．

現在のベルギーの二言語主義は通常，以下のように理解されている．二つの国語は平等であるべきだが，その支配圏は，二言語の使用が許されるブリュッセルを除いて，その言語が優位の母語である国内の地域に限られる．1962年から1963年にかけての言語法は，フランドルとワロニーの境界を定めたが，しかしそうするについてはいろいろな困難が存在した．例えば，コーメン・ムスクルン（Komen-Moeskroen，人口7万5千人）として知られる地域は主にフランス語地域であるが，ベルギーのフランス語地域とは接しておらず（本稿末＜地図2＞参照）[10]，地理的に西フランドル地方にあるにもかかわらず行政上の目的でエノー(Hainaut)州に引き渡された．しかし，この地域での少数派のオランダ語話者の権利は保護された．一方、

このワロニーに対する譲歩の見返りとしてフーロン（Fourons，またラント・ファン・オーバーマースLand van Overmaasとも呼ばれる．人口4400人）は，オランダのリムブルフ州境界線の南に位置するが，ベルギーのリムブルフ州に所属させられた．この地域はベルギーのオランダ語地域と接しておらず地理的にはリエージュ地方の一部であるが，ここではフランドル人が優位を占めているのである．先程のコーメン・ムスクルンの場合のように，少数派（ここではワロニー人）の言語上の権利は保護されている[11]．

そもそもこれまで日本で，フランドル語すなわちベルギーで話されているオランダ語の状況について一般にあまりよく知られるようになることは少なかった．ベルギーではフランドル語が19世紀末に中等教育にも取り入れられた時，教養あるフランドル語の発音，綴字はいかにあるべきかが議論され，その結果，基本的にオランダのホラント方言(Hollands)をもとにした，いわゆる「標準オランダ語」(ABN; Algemeen Beschaafd Nederlands)を取り入れる方向が採られ，それ以来，フランドル語はオランダの標準語にかなり似てきた．現在は，フランドル語と「標準オランダ語」との間には，基本的にその発音，語彙等においてあまり大きな差異が認められなくなっている．しばしばある誤解というのが，フランドル語はオランダ語と何らかの関係はあるけれども，一つの独立した言語であるとする見方である．言語学関係の出版物においてさえ，フランドル語をゲルマン語派の独立した一言語だと分類する傾向が今でもある．確かに，ベルギーは16世紀末以来，固有の歴史を歩んできており，このような誤解が生まれ行き渡ったとしても不思議ではない．オランダでの日常的な用法としては，フランドル語とはベルギーで話されているオランダ語のことである．しかし，書き言葉としてのフランドル語というものはなく，話し言葉としてのみ存在する．フランドル人が何かものを書く時，使うのはオランダ語である．よって，両国の言語を併せて「ネーデルラント語」と呼ぶべきであろうと考

え方も実際にある．もっとも，口語においてはこの「ネーデルラント語」という語は今日なおオランダでは「オランダ語 (Hollands)」と，またベルギーでは「フランドル語 (Vlaams)」と競合している．このように，対象とする言語（方言）の呼称に関する問題などベルギーのフランドル語を巡る問題は歴史的に複雑な状況を背景としており，その考究なしには解決が難しい場合が多い．ただ先に触れたように，フランドル語は書き言葉として「標準オランダ語」に依存するという点で，国境を越えた方言のあり方として方言研究の興味深い一側面を提供してくれる．

注

1) Donaldson (1999:40), 2) Comrie et al.(1999:24-5), 3) Donaldson (1999:125-6), 4) 増田 (1975:7-8), 5) 増田 (1975:3,9), 6) Donaldson (1999:44), 7) 川村 (1995:64), 8) 小川 (1994:103-7), 9) 増田 (1975:4-5), 10) Donaldson (1999:22,29), 11) Donaldson (1983:52-3)

参考文献

Comrie, B. et al. : *The Atlas of Languages*. London 1996.『世界言語文化図鑑』（片田房訳）東洋書林 1999.

de Grauwe, L.: 'Das historische Verhältnis Deutsch-Niederländisch "revisited",' *Amsterdamer Beiträge zur älteren Germanistik* 35(1992), p.191-205.

de Vries et al. : *Het verhaal van een taal*. Amsterdam 1994.

Donaldson, B. C. : *Dutch - A liguistic history of Holland and Belgium*. Leiden 1983.『オランダ語誌』（石川 光庸，河崎 靖 訳）現代書館 1999.

Frings, Th. : *Die Stellung der Niederlande im Aufbau des Germanischen*.

Halle (Saale) 1944.

Goossens, J. : *Inleiding tot de Nederlandse Dialectologie*. Groningen ²1977.

平凡社：『世界大百科事典』

檜枝陽一郎：「オランダ語の起源について—英語とドイツ語のはざまで—」『日蘭学会会誌』第16巻 第2号(1992) p.17-38.

Hoops, J. : *Reallexikon der germanischen Altertumskunde*. Vol.9 (1995) Berlin

川村三喜男:「民族・宗教・言語」『オランダ・ベルギー』新潮社 1995, p.59-68.

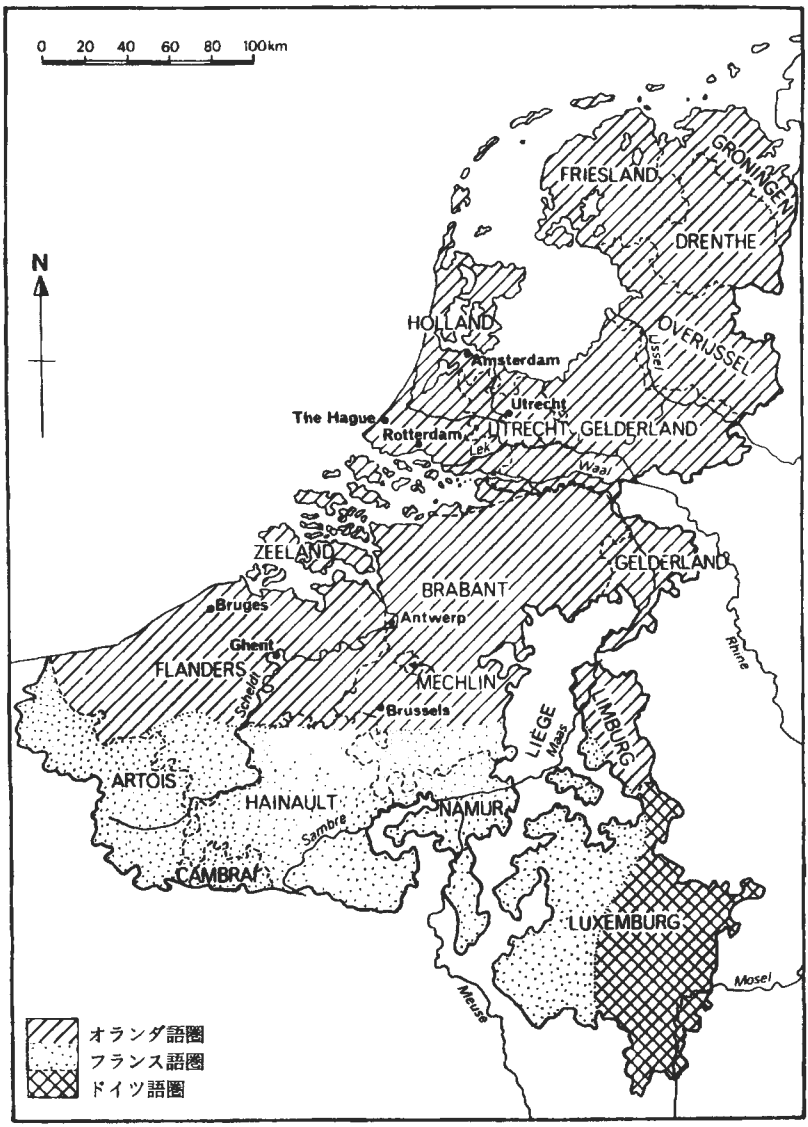
増田純男：「ベルギーの言語紛争」『言語』Vol.4, No.11 (1975年11月号) p.2-9.

小川秀樹：『ベルギー ヨーロッパが見える国』新潮選書 1994.

Penzl, H. : *Methoden der germanischen Linguistik*. Tübingen 1972.

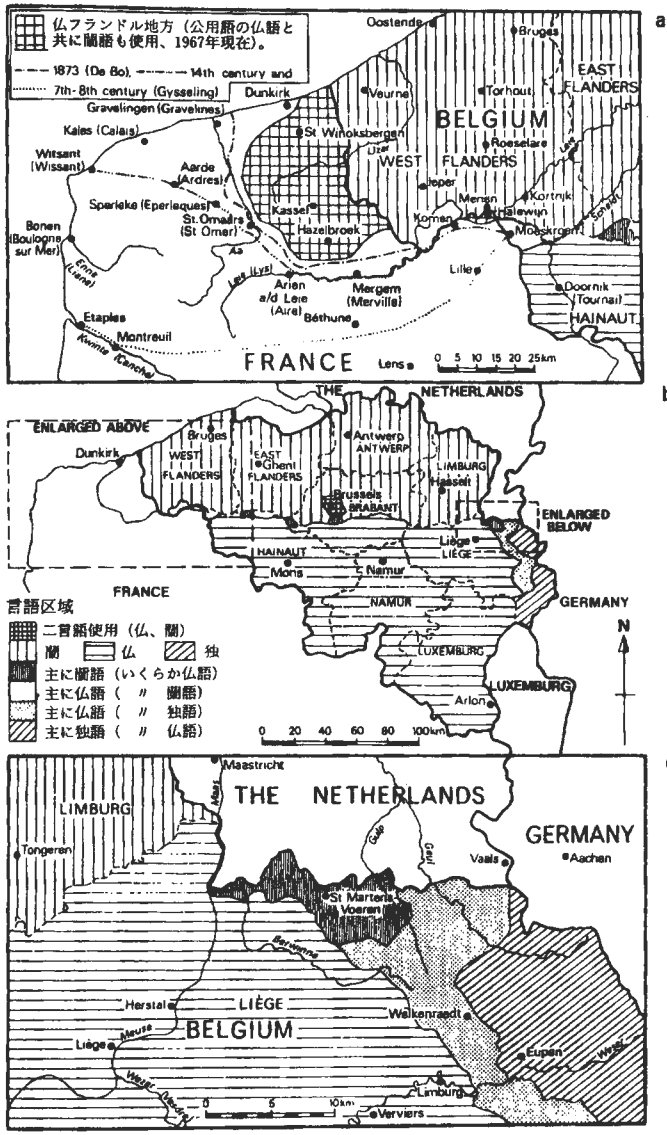
Sanders, W. : 'Oudnederlands. Drie hoofdstukjes uit de vroegste Nederlandse taal- en letterkunde,' *Tijdschrift voor Nederlandse Taal- en Letterkunde* 88(1972), p.161-77.

＜地図１＞



1500年前後，ブルゴーニュ公時代の　1）言語分布図　2）リエージュ司教領　3）ライン川，マース川，スヘルデ川，デルタ地帯（干拓前の様子）

＜地図２＞



（a）ベルギー西部地域における言語境界線（過去と現在）。（b）今日のベルギーにおける言語境界線および言語協同体。（c）ベルギー東部フール地域における言語境界線。